相が認められる。津雲Ａ式の出土は比較的多く、彦崎ＫⅠ式はごく少ない。広江・浜遺跡ではこの二型式の比率が逆転した様相がうかがえる。彦崎ＫⅡ式については、彦崎ＫⅡ式とこれに先行する津島岡大Ⅳ群[4]に近い段階と思われるものがある。

以上、出土土器について概観したが、中期末の土器あるいは後期の諸型式の土器については近年研究が進展しており、詳細な検討が必要と思われる。

３　サヌカイト

岡山県の瀬戸内海沿岸地域における縄文時代後期のサヌカイト流通については、先学の研究により讃岐から板状の原材の形で持ち込まれたことが指摘されている[5]。本遺跡から出土した約15kgのサヌカイトについては土器との共伴関係が不明確ではあるが、板状の原石・剥片などが含まれており、サヌカイトの流通および石器生産技術を考えるうえで重要な資料と考えられる。

こうした視点から溝落遺跡のサヌカイト製品をみてみると、次のように板状の素材から製品を製作するまでの各過程のものが残されていることがわかる。板状剥片 **S84**～**S87**・原石 **S88**は讃岐から持ち込まれたままの状態に近いものであろう。**S88**は元々板状を呈していたためであろうか、石質を確かめるために上下をわずかに打ち割った以外はそのままの状態で持ち込まれているようである。**S106**は板状剥片から剥片を剥離していく過程のよくわかる石核である。第70図の実測図上方にあたる二辺で、原礫面あるいは分割面を打面とする剥片剥離類型Ⅲ[5]と呼ばれる方法で剥片を剥離している。こうした剥片生産には砂岩製やサヌカイト製の敲石（**S83**・**S90**等）が用いられたと考えられる。特にサヌカイト製敲石については他に類例を確認できず、この地域におけるサヌカイト供給の潤沢さを示すものかもしれない。二次加工のある剥片の中には、**S61**のような石鏃未製品と考えられるものや、**S73**のような折れ面を交互剥離によって鋭い縁辺に加工していく過程のものなどもある。これらの資料からさらに深く石器生産技術の検討を行う必要があるが、今後の課題としたい。

また、溝落遺跡の所在する児島西岸周辺では、これまでにも広江・浜遺跡や阿津走出遺跡から板状剥片を含む多量のサヌカイトが出土しているが、その実態は必ずしも十分に報告されているとは言い難い。今後は各遺跡から出土したサヌカイト製品の内容を明らかにすることとあわせて、サヌカイトの流通及び石器生産技術を検討する必要があるだろう。

４　倉敷市玉島に産出する流紋岩の流通

溝落遺跡の石器石材としてはそのほとんどがサヌカイトであるが、流紋岩や黒曜石も認められる。ここではサヌカイトに次ぐ量が出土している流紋岩について述べてみたい[6]。その量は611.6gとサヌカイトと比較すれば微々たるものではあるが、サヌカイトに席巻されたこの地域の石材事情の中で地元石材がどのように流通したかを検討するのも無意味ではなかろうとの意図からである。

この流紋岩に関しては、広江・浜遺跡の出土例について間壁忠彦が記述している[7]。「ち密で均質な硬質で、灰色のチャートを思わす石質」、「縦長く剥離しやすい材質」と特徴の説明があり、「サヌカイトなどに劣らぬ石材」と位置づけている。また、産出地は「倉敷市沙美海岸の東方の台地上」であること、利用範囲は「倉敷市西部・旧玉島地区の縄文貝塚」などで「わずかながら知られて」いるが、「石器としての使用例はあまり知られていない」ことも既に指摘している。これ以後では出土例の報告がいくつか認められる程度である。管見の限りでは流通範囲などを具体的に検討した論考などはない。

流紋岩が産出するのは倉敷市玉島黒崎にある小原漁港南側、沙美海水浴場の東側の丘陵上である。丘陵のほぼ中央に天台宗寺院である本性院があり、その南側山頂付近に露頭がみられたという。現在は土砂採取によって削平されてしまっており、露頭を確認することはできない。しかし、干潮時に東側の砂浜から回り込み、崩落した崖面を探すと、土砂に混じった流紋岩礫を採取することができる。また、付近の集落の石垣などにも人頭大の流紋岩が積まれていることがあり、この付近で産出したことは間違いないであろう。

第71図　流紋岩産出地位置図（S＝1 /25,000）

採取される礫の表面は白く風化しているが、打ち割ると緑灰色の面が現れる。1㎜大の石英・長石の粒が含まれ、断面には平行の縞模様も認められる。比較的ガラス質が強く、市内で産出する石材の中では水晶に次いで剥片石器に適した素材といえる。ただ、実際に打ち割ってみると、堅い上にひび割れも多く、割りにくい石であることがわかる。サヌカイトのように板状に割ることは極めて困難である。

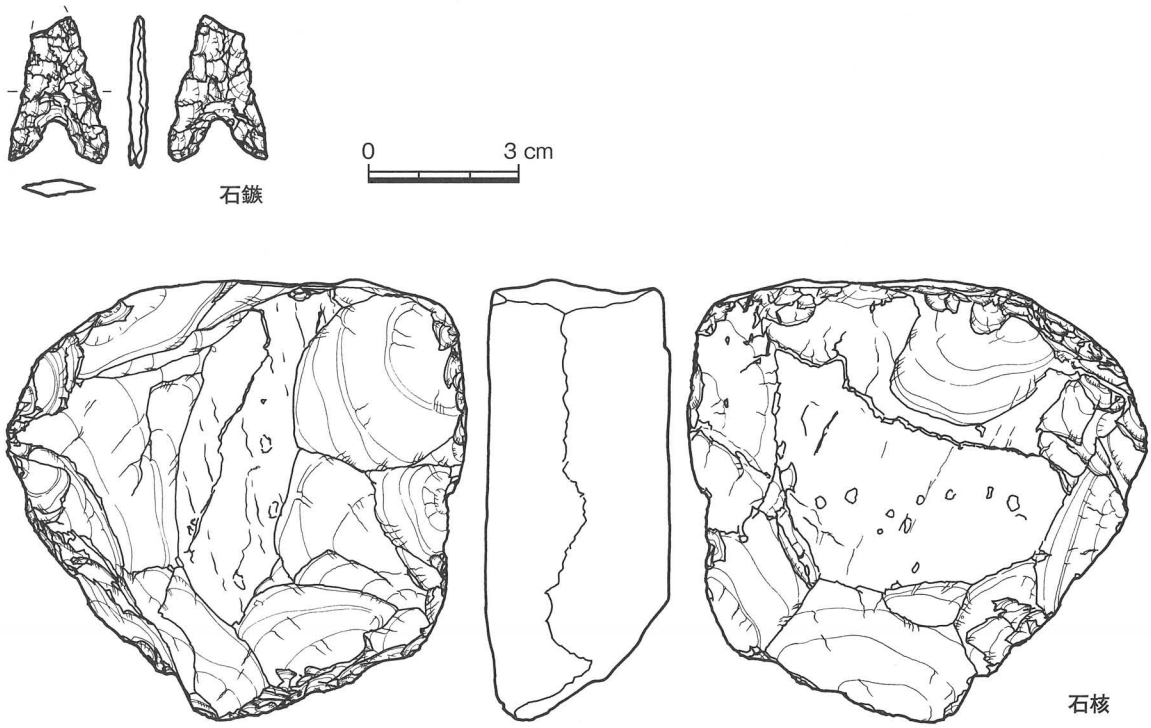
こうした材質の特徴もあってか、間壁も指摘しているように石器製品は極めて少ない。溝落遺跡でもスクレイパー１点（**S60**）、使用痕のある剥片１点（**S77**）が確認できるのみである。市内にある他遺跡の例を探して確認できたのは、個人コレクションの石鏃１点を除くと、スクレイパーと石核がわずかばかりである。第72図の石鏃は倉敷市玉島黒崎の西元浜貝塚で採集されたとされる。先端部は失われており、残存長3.00㎝、幅1.95㎝、厚さ0.39㎝、重量1.7gである。抉りの深い凹基鏃であるが、調整加工は粗雑である。西元浜貝塚は縄文中期から後期を中心とした貝塚である[8]。この石鏃も調整加工などから中期から後期にかけてのものである可能性が高い。第72図の石核は倉敷市玉島黒崎の新殿遺跡で採集されたものである。長さ8.81㎝、幅9.0㎝、厚さ3.65㎝、重量420.6gである。裏表両面に原礫面を残し、周縁部はかなりつぶれが著しい。剥片の剥離にあたっては、交互剥離による部分と側面を打面として剥離した部分がある。いずれも石核に対して求心状に剥離を行っている。新殿遺跡は流紋岩の原産地から北東に1.5㎞ほどの谷間に位置する遺跡である。分布調査時にサヌカイト製石鏃や弥生土器片・須恵器・亀山焼片なども採集しているが、発掘調査などは行われておらず、この石核（第72図）の属する時期については不明と言わざるをえない。

このように製品の極めて少ない石材ではあるが、流通範囲は意外と広くに及んでいる。表2は管見の限りではあるが、玉島黒崎産流紋岩の確認できる遺跡を示したものである。中津貝塚・西元浜貝塚など産出地にごく近い貝塚をはじめ、島地貝塚・里木貝塚など玉島周辺の貝塚からの出土例が多いのは当然として、東は岡山市南区彦崎の彦崎貝塚[9]、西は笠岡市西大島の津雲貝塚[10]でも確認されて

いる。北に向かっての分布は不明であるが、備中の沿海部と児島西岸から北岸にかけての流通範囲が押さえられる。

剥片石器の石材としてほとんどがサヌカイトによってまかなわれているこの地域において、個々の遺跡における出土量はサヌカイトと比較すると圧倒的に少ない。しかし、津雲貝塚における剥片32点という数、彦崎貝塚における石核[11]の出土を考慮すれば、各遺跡において流紋岩を用いた石器製作を指向していたことは間違いなく、同地域に出土する黒曜石等とは一線を画すべきであろう。

利用された時期を考える上では、土器との共伴関係が不明なものが多いのが残念である。ただ、磯の森貝塚の出土例から縄文前期には利用され始めたと考えられる。さらに後期の貝塚である西元浜貝



第72図　玉島産流紋岩を用いた石器（S=2/3）

遺跡名	所在地	器　種	点数	重量（g）	備　考
彦崎貝塚	岡山市南区彦崎	石核・剥片	6	1,062.0	範囲確認調査（2005）
磯の森貝塚	倉敷市粒江	剥片	2	60.0	道路改修工事（1982）
船倉貝塚	倉敷市船倉町	剥片	12	41.3	道路建設工事（1991）
広江・浜遺跡	倉敷市福田町広江	スクレイパー	2		校舎建設工事（1966・1978）
溝落遺跡	倉敷市児島塩生	剥片・ＵＦ・スクレイパー	41	614.6	消防署建設工事（2006）
里木貝塚	倉敷市船穂町船穂	スクレイパー	1		学術調査（1969）
島地貝塚	倉敷市玉島八島	剥片			中山頼夫コレクション（表採）
岸本貝塚	倉敷市玉島道口	剥片			中山頼夫コレクション（表採）
西元浜貝塚	倉敷市玉島黒崎	石核・剥片	14	499.9	宅地造成工事（1990）
西元浜貝塚	倉敷市玉島黒崎	石鏃	1	1.7	宗澤節雄コレクション（表採）
中津貝塚	倉敷市玉島黒崎	剥片・スクレイパー			中山頼夫コレクション（表採） 宗澤節雄コレクション（表採）
新殿遺跡	倉敷市玉島黒崎	石核	1	420.6	分布調査（表採）
原貝塚	笠岡市西大島	剥片	2	14.4	保育園造成工事（2012）
津雲貝塚	笠岡市西大島	剥片	32	140.5	宅地造成工事

表２　玉島産流紋岩を出土する遺跡

塚や中津貝塚での採集例などから縄文後期にも利用され、広江・浜遺跡出土例によって晩期まで使用されたことがわかる。

今後の課題としては、利用時期および流通範囲を精査することが必要である。土器との共伴関係から時期のわかる例を押さえていき、利用の始まりと終わりを着実に把握すること、そして西の福山湾岸や東の瀬戸内市周辺の貝塚における出土の有無を確認しなければならない。その上で、サヌカイト流通圏内においてこの種石材の開発がどのような意味を持っていたのかを考えていく必要があるだろう。

註

（1） 1996（平成8）年に個人住宅の浄化層工事の際に出土した遺物を採集し、倉敷埋蔵文化財センターで保管。体験学習等の教材として活用しているため、現在も整理中である。整理終了後に報告を予定。

（2） 矢野健一「北白川Ｃ式平行期の瀬戸内地方の土器」『古代吉備』第16集　古代吉備研究会 1994

（3） 亀山行雄ほか「長縄手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』189　岡山県教育委員会 2005

（4） 阿部芳郎ほか「津島岡大遺跡4」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第7冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1994

（5） 竹広文明『サヌカイトと先史社会』渓水社 2003

（6） 流紋岩の同定については、倉敷市立自然史博物館の武智泰史氏にご教示いただいた。

（7） 間壁忠彦ほか「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報告 第14号』（財）倉敷考古館 1979
間壁忠彦ほか『倉敷考古館研究集報告 第7号　里木貝塚』（財）倉敷考古館 1971

（8） 平井勝「第三章 縄文時代」『岡山県の考古学』（株）吉川弘文館 1987

（9） 彦崎貝塚出土の流紋岩の実見に際しては岡山市教育委員会の田嶋正憲氏にお世話になった。

（10） 津雲貝塚出土の流紋岩の実見に際しては笠岡市教育委員会の安東康宏氏にお世話になった。

（11） 田嶋正憲『彦崎貝塚』岡山市教育委員会 2006